

デイヴィッド・ホックニーと〈時〉のパースペクティヴ —— マルセル・ブルースト『失われた時を求めて』との関わりから

田中 麻帆（早稲田大学）

デイヴィッド・ホックニー（1937-）は、マルセル・ブルースト著『失われた時を求めて』を青年時代から愛読しており、そこからの影響をほのめかしている。しかし先行研究の多くはホックニー作品とこの小説の関係について、画家の発言を紹介するに止まり、制作の経緯や造形的側面の分析に基づいた詳細な意味内容の解釈は、いまだ行われていない。このため本発表では、同小説における「時間」や「記憶」に関する記述や、関連する文学論を1970～80年代のホックニー作品と照合し、主題や表現方法、制作理念との関わりについて考察する。

ホックニーが1970年代初頭に制作した《椅子とシャツ》をはじめとする作品には、誰も座っていない椅子が描かれているが、これらは多くの先行研究において人間のメタファーとされてきた。しかし画家自身の言葉を改めて検討すると、このモチーフには『失われた時を求めて』に描写された記憶の想起に関する場面との呼応関係がみられる。また、70年代後半に両親を主題として描いた肖像画においては、敢えて『失われた時を求めて』の本そのものが全巻描き込まれており、ブルーストの参照がより意識的に行われ始めたことがわかる。70年代のホックニー作品はこれまで自然主義の問題から考察されることが多くあったが、このようにモチーフを再考すると、『失われた時を求めて』に記述された「時間」や「記憶」に主題を託す画家の意図が、読み取れる。

1980年代になると、ホックニーは写真を用いたコラージュを400点近く制作し、遠近法の問題と新たに取り組むが、そこにもブルースト的な「記憶」という観点がみられる。ただしこれについても先行研究においては十分に汲み取られてきたとは言い難く、ホックニーがその制作に際し言及した『失われた時を求めて』に関するロジャー・シャタックの文学論との関わりも、詳細に検討されていない。しかしシャタックの文学論を分析すると、ホックニーがシャタックを通じて『失われた時を求めて』の深い理解に至り、物語の構造を写真コラージュの制作プロセスや、80年代の絵画作品の空間構成にも取り入れた可能性が窺える。

以上から、ホックニー作品において1970年代には個々のモチーフに見られた『失われた時を求めて』の影響が、物語への理解の深まりと共に変化を見せ、80年代には幅広く写真コラージュから油彩画にいたるまで作品の構造に組み込まれるようになった可能性を示したい。このことで、従来深く検討されてこなかった文学的源泉が、ホックニー作品における「時間」や「記憶」という主題に密接に関わり、作品の本質的部分との接点を持つことが、新たに浮き彫りとなるであろう。